

「チリの闘い」

★★★★★

第1部 ブルジョワジーの叛乱

第2部 クーデター

第3部 民衆の力

2016 (平成28) 年12月10

日鑑賞<シネ・ヌーヴォ>

監督・製作・脚本：パトリシオ・グスマン

第1部1975年

第2部1976年-77年

第3部1978年-79年

チリ、フランス、キューバ映画・263分

配給/アイ・ヴィー・シー

<あの話題作をやっと鑑賞！>

本作より先に観た『コロニア』(15年)は、1973年9月11日の軍事クーデターで誕生したチリのピノチェト軍事独裁政権の下で『コロニア・ディグニダ』なる拷問施設が存在したことを「告発」する映画だった(『シネマルーム38』161頁参照)。『ハリー・ポッター』シリーズの子役から大きく成長(成熟?)した女優エマ・ワトソンを主役としたコロニアへの潜入(?)と脱出劇の多少の粗さや甘さは別として、ピノチェト政権とナチスの残党が結託したこんな極秘要事が存在していたことを同作ではじめて知ってビックリ。

本作に登場する1970年9月4日の大統領選挙で36.2%を獲得して、元大統領のアレッサンドリの34.9%、第三候補のキリスト教民主党のトミッチの27.8%に辛勝し、議会もアジェンデが大統領に選出されたため、11月3日には世界ではじめて自由選挙によって社会主義政権であるアジェンデ人民連合政権が誕生した。しかし同政権は、その3年後の1973年のピノチェト將軍連合による9.11軍事クーデターにおける大統領府の空爆によって崩壊し、最後まで大統領府からの撤退を拒否したアジェンデ大統領は大統領府内で自殺した(諸説あり)。しかし、ピノチェト政権はその後1990年に崩壊するまで17年間も続いたから、アジェンデ大統領を支持した左翼や人民勢力は大変だったはずだ。

1975年の第1部「ブルジョワジーの叛乱」、1976年の第2部「クーデター」、1978年の第3部「民衆の力」、合計263分の超大作『チリの闘い』3部作は『コロニア』の公開と同じ時期に3部作が一挙に公開され、『キネマ旬報』10月上旬号では3人の評論家が星5つ、4つ、5つをつけていたので何とか観たかったが、タイミングが合わず見逃していた。それを、やっと今回鑑賞することになった。

<こんな軍事クーデターが目の前で現実！>

「ブルジョワジーの叛乱」とタイトルされた第1部の冒頭は、アジェンデ大統領が執務するモネダ宮殿が空爆されている映像から始まる。これが1973年の9月11日正午頃に起きた軍事クーデターの現場で撮影された現実の姿だ。もちろん内部の様子はわからないが、破壊され煙を上げている宮殿の中からの脱出をあくまで拒否したアジェンデ大統領が、その中で名誉ある「自殺」の道を選んだことは容易に想像できる。それは「本能寺」を明智光秀の大軍に襲われたことを知った織田信長が「是非に及ばず」とすぐに観念し、切腹した心情ときっと同じだ。しかし、力と力による弱肉強食の時代の戦国時代ならともかく、1970年9月4日の民主的選挙で大統領に選ばれ、その後3年半余りを大過なく政権運営し、1973年3月の議会選挙でも人民連合は43%の得票率を確保し、野党は大統領解任に必要な3分の2の議席獲得に失敗していたのだから、その約6カ月後にこんな軍事クーデターを起こすのはもっての他、民主主義の否定であることは明らかだ。

そこで問題は、誰がどう仕組んでこれを起こしたのかということになる。明智光秀の謀反については諸説あるが、この軍事クーデターは歴史上はじめて民主的選挙によって誕生した社会主義政権であるアジェンデ人民連合政府を倒すために、アメリカのCIAがチリの野党や反共勢力、軍部と協議を重ね、さまざまなやり口で失敗を重ねた挙句の最後の手段であったことが、本作を見ているとよくわかる。

なるほどそうだったのか!映画にはよく冒頭に「事実に基づく物語」という字幕が出ることもあるが、それはあくまで事実にもとづいて製作し脚色し、それを俳優たちが演じた物語という意味。しかし本作はそうではなく、あくまでドキュメンタリー映画だから、その撮影や編集に製作者側の視点や判断が含まれているにしても、フィルムに収めた冒頭の大統領府の情景はあくまで現実のものなのだ。さあ、そんな全3部作の展開はいかに・・・。

<選挙の事前取材は?クルーたちのスタンスは?>

冒頭にショッキングな映像を短い時間で見せつけた後、スクリーン上は6カ月前に遡り、アジェンデ政権誕生後およそ2年半が経過した1973年3月の議会選挙の事前取材の風景を延々と描いていく。市民への質問は「選挙に対するあなたの立場は?」「チリの将来についてどう思うか?」等の定型的なものだが、それに対する市民の反応は①アジェンデを支持する労働者階級②国民党を支持する反共主義のブルジョワ③政治に関心のない人々と3つに分かれている。これは日本で年中行事のように行われている国政選挙や地方選挙で見られる風景と同じだし、今年最大のイベントとなった11月8日のアメリカ大統領選挙に向けての事前取材の風景とも同じだ。

ここで注目すべきは、テレビ局「チャンネル13」と名乗っているのは真っ赤なウソで、取材をしている撮影隊は実は本作を監督・製作・脚本したパトリシオ・グスマンのスタッフということだ。日本ではそんなインチキは到底考えられないが、未だ民主主義や法治が成熟していない1973年当時のチリではそれが可能だったらしい。アメリカ大統領選挙では開票の中盤からトランプの優位が明確になり、終盤からラストに至るまでそれが変わらなかった。しかしスクリーン上の風景では、中盤にキリスト教民主党の優勢、人民連合の敗北と発表され、キリスト教民主党の支持者たちは勝利の喜びを爆発させていたにもかかわらず、真夜中過ぎに判明した投票結果では、野党は支持率を伸ばしたが、大統領解任に必要な(3分の2)の圧倒的多数を形成するには程遠かった。むしろ人民連合は、前回選挙とほぼ同じ得票率に終わったとはいえ、議席数を増やしたことが明らかにされていく。本作ではグスマンたちスタッフの議会選挙の事前取材の姿と並んで、人民連合支持派たちのデモの風景が頻りに登場する。これは昨今韓国で毎週のようにくり広げられている大動員デモの姿と同じだが、チリもこれだけの人民連合支持派の街頭行動があったからこそ、アジェンデ大統領を支持する議員たちが依然として43%という高い支持率を獲得できたわけだ。

<CIAや右派など反対派の策謀は?>

日本では戦後復興の混乱期を経た後、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、大平正芳、中曽根康弘と歴代自民党政権が続いたが、1993年8月にはじめて細川護熙8党連立政権が誕生したことによって自民党が野党に転落した。さらに、小選挙区制の導入によって次第に二大政党制となり、2009年8月の総選挙では民主党への「政権交代」が実現した。そして、その後2012年12月26日の総選挙で「再度の政権交代」となり、今日の安倍長期政権に至っている。

このように日本では民主的選挙を通じてしか「政権交代」はありえないが、2016年11月25日に死亡したフィデル・カストロが成功させた1959年1月のキューバ革命は軍事革命。したがって、その転覆のためアメリカがCIAを通じてあらゆる軍事的手段を検討し、ピッグス湾事件によってそれを実行したのは仕方ない。しかし、民主的選挙を通じてアジェンデ社会主義政権が誕生した以上、それを軍事力で転覆するのは無茶。これをひっくり返すのは次の民主的選挙で、というのが民主主義の原理原則だ。したがって、1973年3月の議会選挙はキリスト教民主党を中心とする野党や、反人民連合勢力にとって唯一のチャンスだったわけだが、そこで人民連合派が意外に頑張り、野党がアジェンデ大統領の解任に必要な3分の2を確保できなかった以上、アジェンデ大統領体制が続くのが当然。それが民主主義のルールだが、チリはそうではなかったことが本作を見ているとよくわかる。さて、CIAや右派などの反対勢力はアジェンデ政権を転覆するためにいかなる方策をとったのだろうか・・・。

<命懸けの撮影!2度と撮ることのできない映画!>

本作のパンフレットにある遠山純生氏の「チリの闘い解説(製作背景+作品解説)」を読むと、「三年目」と名付けられたグスマン監督らのチームが、ファシスト勢力に対する労働者や農民を中心とした国民の闘争をフィルムに収める活動を継続することの危険性をよく知っていたことがよくわかる。また、今にも爆発しそうな自国の状態と差し迫った変化に対して十分に意識的であった彼らが、自分たちの映画が価値ある歴史的記録としての役割を果たすことになると考えていたこともよくわかる。

第1部のラストと第2部の冒頭には画面が激しく傾くシーンが登場するが、これは字幕で「ヘンリクセンに捧げる」と表示されるとおり、1973年6月29日の朝サンティアゴで起きたいわゆる「タンク騒動」(機甲部隊によるクーデター未遂事件)を撮影していたカメラマンのヘンリクセンに対して発砲した軍人の弾が命中し、ヘンリクセンがカメラを回したままの状態であって倒れてしまったためだ。これをはじめとして、本作の撮影はまさに命懸けであり、本作を奇跡的に完成させることができたのは、撮影したフィルムを国外に持ち出すことに奇跡的に成功したためであることがわかる。したがって、1973年9月11日の軍事クーデターで誕生したピノチェト軍事政権下のチリで、本作が公の場で上映されることがなかったのは当然だ。グスマン監督も本作完成のために赴いたキューバで6年間を過ごした後はチリに戻ることはなく、スペイン、フランスへと移り住んで、次々とドキュメンタリー作品を監督し続けたらしい。

ちなみに、彼の長編第8作にあたる『チリ、頑固な記憶』(97年)は、やっと1997年になってチリに帰国し、本作をアジェンデ時代を知らない若い学生たちやかつての闘争を目撃した、あるいは闘争に参加した人々に見せた際の彼らの反応を主題の一つにしたドキュメント映画らしい。遠山純生氏の解説は「最後に、『チリの闘い』完成から十四年後に、同作をめぐって作家が述懐したことばを紹介する。」としているので、ここであえてそれを引用すれば、次のとおりだ。

「若くて幸運にもある種の波紋を映画に撮ることができたと思います。しかしそのときには、何が起きているのかわかっていないのです。歳を取ると、それが何だったのかほんの少し理解し始める。かつてと同じように今でも、いろいろな人を通じて『チリの闘い』の持つ重みを実感させられます。『チリの闘い』は二度と撮ることのできない映画です。たまたまほかに類を見ない状況に遭遇し、無我夢中でそれをフィルムに収めました。もう二度とあんなことは起こらないでしょう」

ちなみに、今回の『チリの闘い』の上映を契機に日本で公開される『光のノスタルジア』(11年)、『真珠のボタン』(15年)は彼の直近の作品らしいから、それにも注目!

<第1部で描かれるテーマは?>

『チリの闘い』全3部作は1973年の9.11軍事クーデターで大統領府が空爆される短いシーンが最大のハイライトだが、第1部「ブルジョワジーの叛乱」と第2部「クーデター」では、そこに至るまでのCIAと結びついたチリの右派勢力とアジェンデを支持する人民連合とのさまざまな闘いが描かれる。

私が学生運動の中で勉強した限りでは、社会主義政権が誕生すれば順次土地や資本(企業)を国有化していくことになるが、チリ憲法を尊重し、それに従い、彼の社会主義改革は憲法のどの要素も侵食しないという確固たる憲法保証に誓名することを条件に議会から大統領に選出されたアジェンデ大統領は、それをどのように実現していったの?また、それに対する右派勢力の抵抗とは?

第1部「ブルジョワジーの叛乱」では、それを①買いためと闇市場②議会のボイコット③学生暴動④経営者組合の攻撃⑤銅山ストライキ、というテーマに分けて見せてくれるのでそれを1つずつじっくりと勉強したい。

<第2部で描かれるテーマは?>

第2部「クーデター」では、1973年6月29日に起きたいわゆる「タンク事件」でヘンリクセンがカメラを抱えたまま倒れる衝撃的なシーンを再度登場させた後、このクーデター未遂事件の詳細を描いていく。軍部によるクーデター計画は、3月の議会選挙で野党の思うような結果とならなかったため、軍の右派によってその実行が決定されていたようだ。ところが、このクーデターに対して議会や野党は沈黙を守り、軍の主力も支援しなかったため、このクーデターは結果的に未遂に終わったらしい。

本作第2部は、その後1973年9月11日に決行された軍事クーデターに向けて、次の動きを時系列に沿って詳細に描いていく。すなわち、①人民連合派が国内で次々と設立を目指す産業コルドン(地域労働者連絡会:複数の工場や企業の従業員からなる組織)の姿、②アジェンデが議会に提出した非常事態関連法をめぐる攻防の姿、③前年に議会を通過していた銃砲取り締まり法案を用いた、軍による合法的な工場の捜索と労働者の拘禁、尋問の姿、④7月5日にアジェンデが発足させた新内閣によるキリスト教民主党との協調の姿、⑤アジェンデ政権を守るようとする労働者・人民連合勢力による大規模デモの姿、⑥徐々に拡大していく軍部による武力攻撃の姿、等だ。

キューバ革命を成功させたフィデル・カストロとチェ・ゲバラは自分たちの軍隊を持っていて、日本を中国から駆逐し、その後は国民党を台湾に追い出した中国共産党も人民解放軍という自分の軍隊を持っていた。しかし、民主的な選挙によって大統領に就いたアジェンデ人民連合政府は自分の軍隊を持っていないから、軍部が反抗し、武力で軍事クーデターを決行すれば、それに対抗できないのは当然。そう考えると、やはり平和革命、社会主義への平和的手法での移行はムリで軍事革命しかないの?本作の第1部、第2部を観ているとそう思わざるをえないが、さて・・・。

<同じドキュメンタリーでも第3部は全く異質!>

私は本作を鑑賞する前から、『チリの闘い』3部作のタイトルが「第1部 ブルジョワジーの叛乱」「第2部 クーデター」「第3部 民衆の力」とされていることに大きな違和感を持っていた。なぜなら、1973年の9.11軍事クーデターで大統領政権が崩壊し、ピノチェト軍事政権に取って変わられたのだから、「民衆の力」など示すことができなかったのが歴史的事実であるためだ。

そんな疑問をもったまま私は第3部「民衆の力」を鑑賞したが、なるほど、第2部の公開から2年後の1978年に公開された第3部「民衆の力」は、歴史の針を第1部と第2部以前の1972年に戻し、アジェンデ政権が大規模な社会変革に取り組み始めてからまだ1年半しか経っていなかった頃、大統領が熱狂的に民衆に迎えられるパレードのシーンから始まる。前述した遠山純生氏の「チリの闘い解説(製作背景+作品解説)」では、「三年目」と名付けられたグスマンのチームは、1973年3月から半ば秘密裏に撮影を開始したと書かれていたから、第3部の冒頭を飾るこの映像は1973年3月より以前の(比較的平穏な時期に)、グスマン監督が撮り溜めていたフィルムを活用したものと考えられる。

したがって「第3部 民衆の力」は同じドキュメンタリーでも、「三年目」チームが1973年3月から半ば秘密裏に命懸けで撮影した「第1部 ブルジョワジーの叛乱」「第2部 クーデター」とはかなり異質で、過去を振り返っての解説調になってくる(?)が、その是非は・・・?

<第3部で描かれるテーマは?>

第3部「民衆の力」は①冒頭のパレードの姿に続いて、次のテーマを描いていく。すなわち、②1972年10月以降の、野党の中でも最も強硬な国民党が主導するアジェンデ政権打倒のための大規模なトラック業界のストライキの姿と、それを阻止するために多数の産業界の組合が力をあわせて製品を近隣地域に運ぶ姿、③広範な物資不足を作り出すため、反アジェンデ派が進めた生活必需品買いだめの姿と、それを摘発する政府と大衆組織の姿、④反アジェンデの動きに対抗するため、同じ地域の労働者たちの仕事を調整する複数の工場、企業の連合体としての産業コルドン(地域労働者連絡会)が次々と結成され、これがチリの民衆勢力の萌芽となっていく姿、等々だ。

なるほど、一国だけの憲法を尊重した上での社会主義的改革はこれほど難しいわけだ。資本主義国では、工場や企業のストライキは労働者がするものと相場が決まっているが、社会主義的改革を目指していた1972年当時のチリでは、企業がストライキを行っていることにビックリ。南北に細長い地形になっているチリでは運送業界が産業の生命線になっていたため、トラック運送業者たちがそのストライキの中心になっていたことがわかると、さらにビックリだ。

<カメラが追っていく第3部の更なる論点は?>

「民衆の力」と題された「第3部」のカメラは、続いて次のような論点を次々と追っていく。すなわち、⑤アジェンデ政権は自分のための軍隊はもたなかったが、1972年11月5日にはキリスト教民主党との協議を経て軍司令官を入閣させて第二次アジェンデ内閣を発足させた。とりわけ、アジェンデが信頼し、民主制を尊重する陸軍総司令官ブラッツを内務大臣に就任させたことによって、左派の労働者の多くは反政府勢力に対する抑止力になるのではないかと期待されたが、さてその現実は何?⑥そんな期待通り、反アジェンデ勢力による大規模なストライキは11月10日には終了し、1972年の「十月スト」は政府転覆には失敗したが、アジェンデ政権に手ひどい経済的ダメージを与えることには成功したため、その影響の広がりは・・・?⑦「十月スト」以降は「民衆の力を作り上げよう」というスローガンが国内で唱えられるようになり、一方では産業コルドンが国内の主要都市で次々とつくられ、他方ではもう一つの「人民勢力」として学生、主婦、労働者、農民からなる独特の「地域部隊」が結成され始めたが、その影響力の広がりは・・・?⑧1973年春半ばになると、反アジェンデ政権の動きと左右の対立がますます激しくなる中、遂に軍部が「ある決断」を下すと・・・?

民主的な選挙で大統領に選出されたアジェンデが憲法の制約下にあったのは当然だが、チリでは軍隊が憲法の下で合法的に存在していたのだから、国有化を核とする社会主義的改革を進めると同時に、軍部を味方に引き入れるための工作をもっと強力にやるべきだったのでは・・・?1973年の9.11軍事クーデターの悲しい結末を見ているとどうしてもそう思ってしまうが、さてその答えは・・・?

<激動の2016年に続く、2017年の大胆予測は?>

2001年の9月11日に発生したアメリカでの同時多発テロも、2011年の3月11日に発生した東日本大震災も、誰もその発生を予測できなかったのは当然。また、今年11月8日のアメリカ大統領選挙でのトランプ氏の当選を多くの人が予測できなかったのと同じように、1970年9月4日のチリの大統領選挙でのアジェンデ大統領の誕生を多くの人が予想できなかったのも当然だ。すると、1973年の9.11軍事クーデターを予想できなかったのも当然?いやいや、本作を観ていると決してそんなことはなく、時期が早いか遅いかの違いはあってもそれは当然に予測できたのでは・・・?

そんな目で、現在多くの新聞が特集している2016年の十大大ニュースを見ていると非常に興味深い。最近少しずつ明らかになってきたトランプ大統領の「人事配置」や「なぜ1つの中国をアメリカが認めなければならぬのか?」等の新しい「トランプ語録」を見ていると、米口の親密さ(?)に比べて、意外に米中対決の姿勢が強いことがわかる。その結果(?)12月26日の新聞各紙では、中国初の空母「遼寧」が駆逐艦やフリゲート艦を従えて、渤海、黄海、東シナ海を通過した後、いわゆる「第1列島線」を越えて西太平洋に進出したこと、その航海では実弾射撃や戦闘機の離発着等の訓練が行われていることが報じられた。トランプ大統領の誕生が決まった翌日にはアメリカでも日本でも株価が大暴落したが、その後は一貫して上昇を続け、今やアメリカは2万ドルの大台突破も目の前に迫っている。2017年は政治も経済もそして外交も軍事も順調に推移してくれることを願っているが、さて激動の2016年に続く2017年の大胆予測は?

1970~73年にチリで現実起きたアジェンデ政権をめぐる本作のドキュメンタリー映像を観ていると、ついそんなことを考えてしまったが・・・。